

欧米での IEEJ アウトルック「Roadshow」に思う

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
専務理事 首席研究員
小山 堅

1 月 19～23 日の週、ウィーン、パリ、ニューヨークを訪問し、それぞれ、OPEC 事務局、IEA、コロンビア大学国際公共政策大学院 Center for Global Energy Policy (CGEP) において、IEEJ アウトルック 2026（以下、アウトルックと略）のプレゼンテーション及び参加者との質疑応答を行う機会を得た。これは、例年アウトルック発表後に実施している Roadshow の一環であり、今回もそれぞれの開催場所で、多数の参加者を得て、アウトルックのポイントをプレゼンテーションし、その後活発な質疑応答・意見交換を実施することができた。改めて、各開催場所において、会議を主催し、運営して下さった OPEC、IEA、CGEP の関係各位に心から御礼を申し上げたい。

今回の Roadshow では、上記の 3 カ所共に多数の参加者があり、極めて率直な意見交換が行われた。必ずしも、これらの会合は、「チャタムハウスルール」の下で行われることが明言されていたわけではないが、インフォーマルで率直な意見交換が参加者間の信頼をベースで行われたこともあり、この小論では、これらの議論の詳細に踏み込むことはしない。むしろ、今回の Roadshow 全体を通じて、筆者がアウトルックの意味・位置づけに関して改めて思ったことを所感として総括的にまとめることとしたい。

アウトルックは、様々な前提を置いて、今後の世界のエネルギー需給がどうなるか、2050 年までの将来像を描くものである。今から 20 年以上先の未来がどうなるか、をエネルギー需給の数量的な分析を通して「見通し」を示すことになる。しかし、翻って見ると、今日我々が目にする足下の国際エネルギー情勢には、かつてないほどの不確実で不透明な状況が存在している。未曾有の混迷と流動化、先行きがどうなるかわからない不安定な状況に世界は苛まれている、といっても過言でないほどである。一言でいえば、来年はおろか、一カ月先、いや極論すれば明日でさえも、世界で何が起こるか予断が許されないほどであると言っても良い。

不確実で不透明な状況・要素は、エネルギー情勢に関する様々な問題として実際に顕在化している。まず、国際エネルギー情勢を大きく揺さぶりうる地政学リスクが多数存在する。イランに関わる諸問題を始めとする中東情勢、ロシア・ウクライナ戦争、ベネズエラ問題などがエネルギー情勢を左右する代表的な地政学リスクである。今後は、台湾海峡を巡る問題なども浮上してくる可能性もある。地球の気温上昇を 1.5℃以内に抑えるために 2050 年には GHG 排出ネットゼロを目指す脱炭素化の重要性は理解されているものの、その実現には大きな課題・制約があり、実際にどの程度の GHG 排出削減になるのか、先行きは極めて不透明となっている。

また、世界の分断が進む中、経済安全保障が重視され、自由貿易・国際分業重視の世界から、戦略物資・技術の国産化やサプライチェーンの強靱化を目指す世界への移行が進んでいることも今後の世界の展望を不透明なものにしている。さらに、従来の世界の安定を担保してきたグローバル・ガバナンスの仕組みそのものが大きく動揺しており、「力による支配」「弱肉強食」の世界が広がっていくのではないかと、との懸念が現実の問題となっているようにさえ見える。

このような「現実」が眼前にある中で、2050 年までの世界の（エネルギーに関する）見

通しを行うことの意味を改めて考えることが求められているのである。その点、まず考えるべき最初の論点は、どのようにすれば、上述してきたような極めて不確実で不透明な国際情勢を長期見通しの中に適切に織り込むことができるか、ということになる。

筆者の見るところ、その問題意識に対する回答は、如何に適切で有意義な「シナリオ」をしっかりと描くことができるかどうかにかかっているということになる。足下の国際情勢が混迷する中では、シナリオ作成そのものが困難に直面することは確かであるが、不確実性・不透明な将来を扱う手法としての、「シナリオプランニング」などのアプローチを十全に活用することも有意義な方法の一つになるものと考えられる。シナリオプランニングによる分析で、発生確率（Probability）の高さは別として、論理一貫した合理性がある（Plausible な）未来像そのものを描き出し、それを数量的に表現していく、という形をとっていくことが一つの方法となるものと考えられる。その点、数量化の前段階として、シナリオ作りそのものが極めて重要になる、ということである。

弊所アウトルックにおける将来見通しでは、2つのシナリオのうち、1つは「レファレンスシナリオ」として、エネルギー政策や技術導入などに関して、足下までの趨勢が今後も持続すると想定しており、「Business as usual」「自然体」としての将来像を描くものである。このシナリオでは、当然のことながら前述したような著しく不確実で不透明な国際情勢を反映することは難しい。むしろ、この「レファレンスシナリオ」はその名の通り、他のダイナミックな「シナリオ」に基づいた将来像を見る上での「レファレンス」「参照基準」としての意味を今まで以上に強く持つことになるのかもしれない。

第 2 の論点は、長期エネルギー需給見通しの価値・意義に関するものである。逆説的になるが、現状の国際エネルギー情勢が混迷し、先行き不透明感が高く、先を見ることの困難性が上がれば上がるほど、将来をどう見るか、が重要になるということである。

多くの経済分野に当てはまることであるが、エネルギーの世界では特に将来のエネルギー需給構造の変化に対応して、供給チェーンや関連インフラ全体を適切に整備していくことが重要であり、そのため整備には長い時間が掛かる、という特徴がある。エネルギーインフラに関しては、構想・計画・意思決定・建設着工・完成・運転開始といったプロセスに、長いものでは 10 年、場合によってはそれ以上の期間を必要とする場合も多い。また、これらのインフラは、完成して運転を始めてから、極めて長期の寿命をもって利用し続けられる場合も多い。設備の種類によっては数十年というケースすら考えられる。このような著しい長寿命性を有するエネルギーインフラについて、将来を見通して現時点で意思決定し、投資を実行しなければならないのである。

だからこそ、エネルギーに関する意思決定者は、将来を見通すための「参考」「参照」がどうしても必要になる。それは、エネルギー政策を立案し、実行するための意思決定にも、ビジネスとして、あるいは企業戦略としての意思決定にも必要不可欠となる。将来が不確実になるほど、意思決定を助けるためのインテリジェンスは重要になるのである。

最後にもう一つ、今回の Roadshow を通して印象に残ったのは、知の世界・インテリジェンスの世界への貢献としては、既存の考え・概念に囚われず、分析や思考の面で新たな地平を切り拓くことに貢献するようなアイデアを提示し、それを形にしていくことの重要性であった。弊所のアウトルックも、毎年、世の中に問うような性質の新たな取り組み・挑戦をハイライト・トピックの形で含むべく、努力している。新たな挑戦には困難が付きまとい、時として批判を呼ぶこともある。しかし、批判を恐れているだけでは知の世界に十分な貢献を行うことが望めない可能性を理解し、前進していくことが重要であろう。

以上